ルニコソ有メレ、我レハ物ヘ行カムズル門出ナレバ、墓无キ疵モ被打付ナバ由无シ、女ヲバヨモ不切ジト云テ、衣ヲ引被テ臥ニケレバ、妻云甲斐无シ、此テヤ弓箭ヲ捧テ月見行クト云テ、起テ亦見ムトテ立出タルニ、夫ノ傍ニ有ケル紙障子ノ不意ニ倒レテ、夫ニ倒レ懸リタリケレバ、夫此ハ有ツル盗人ノ、厭ヒ懸リタル也ケリト心得テ、音ヲ擧テ叫ケレバ、妻憑可咲ク思テ、耶彼ノ主盗人ハ早ウ出テ去ニケリ、其ノ上ニハ障紙ノ倒レ懸タルゾト云フ時ニ、夫起上リテ見ルニ、實ニ盗人モ无ケレバ、障子ノソヽロニ倒レ懸タリケル也ケリト思ヒ得テ、其ノ時ニ起上リテ、裸ナル脇ヲ搔テ、手ヲ舐テ其奴ハ實ニハ我ガ許ニ入リ來テ、安ラカニ物取デハ去ナムヤ、盗人ノ奴ノ障紙ヲ踏懸ケテ去ニケリ、今暫シ有ラマシカバ、必ズ搦テマシ、和御許ノ弊クテ、此ノ盗人サハ逃シツルゾト云ケレバ、妻可咲ト思テ咲テ止ニケリ、世ニハ此ル嗚呼ノ者モ有ル也ケリ、實ニ妻ノ云ケム樣ニ、然許臆病ニテハ、何ゾノ故ニ刀弓箭ヲモ取テ、人ノ邊ニモ立寄ル、此レヲ聞ク人皆男ヲ憑ミ咲ケリ、此レハ妻ノ人ニ語ケルヲ聞繼テ、此ク語リ傳ヘタルト也、

〔奥州後三年記上〕將軍（源義家）つはものどもの心をはげまさんとて、日ごとに剛臆の座をなんさだめける、日にとりて剛に見ゆる者どもを一座にすへ、臆病にみゆる者を一座にすへけり、〇中略將軍の郎等どもの中に、名をえたる兵どもの中に、今度殊に臆病なりときこゆるもの、すべて五人ありけり、これを略頌につくりけり、鏑の音きかじと耳をふさぐ剛のもの、紀七、高七、宮藤王、腰瀧白、末四郎といふは、末割四郎惟弘が事なり、

〔奥州後三年記中〕末割四郎これ弘、臆病の略頌に入たる事をふかくはぢとして、今日我剛臆はさだまるべしといひて、飯さけおほくくひて出、こと葉のまゝにさきをかくる間に、かぶら矢頸の骨にあたりて死す、射きられたる頸のきりめより、喰たる飯すがたもかはらずして、こぼれ出たり、みるもの慙愧せずといふ事なし、將軍これを聞て、かなしみて曰く、もとよりきりとをしにあ